

マーラー

GUSTAV MAHLER (1860-1911)

交響曲 第1番 二長調「巨人」

Symphony No.1 in D major "Titan"

- | | |
|---|-------|
| ① 1 Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut | 14:58 |
| ② 2 Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell | 7:48 |
| ③ 3 Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen | 9:32 |
| ④ 4 Stürmisch bewegt - Energisch | 18:47 |

エリアフ・インバル (指揮)

ELIAHU INBAL (conductor)

東京都交響楽団

TOKYO METROPOLITAN SYMPHONY ORCHESTRA

2012年9月15日 東京芸術劇場、9月16日 横浜みなとみらいホール にて収録

Recording Date: 15,16 Sep. 2012

Recording Location: Tokyo Metropolitan Theatre, Yokohama Minato-Mirai Hall

TOTAL TIME 51:06



SUPER AUDIO CD



COMPACT
DIGITAL AUDIO

Hybrid Layer Disc



HIGH QUALITY

HQ

Super Audio CD



DSD

RECORDING

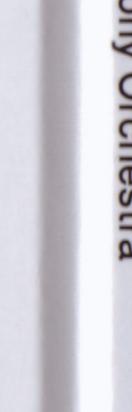
DDD STEREO

EXTON

Mahler: Symphony No.1 "Titan"

Elijah Inbal cond. Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra

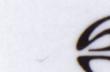
4



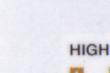
526977005115

このCDを、権利者の許諾なく販賣
業に使用すること、ネットワーク等
を通じてこのCDに収録された音を
送信できる状態にすることを禁じま
す。また、個人的に楽しむなどの場
合を除き、著作権法上、無断複製は
禁じられています。

13.6.26



SUPER AUDIO CD



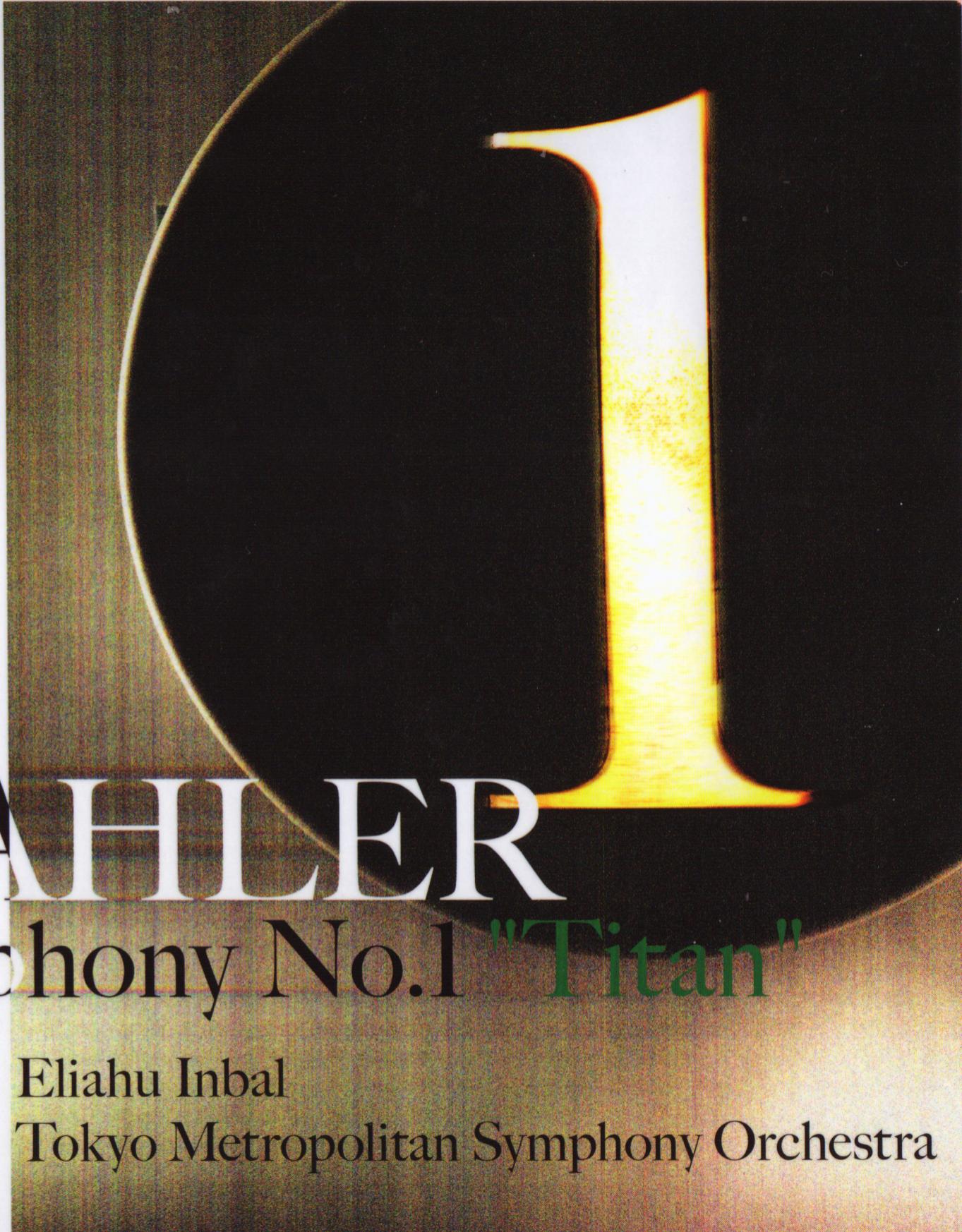
HIGH QUALITY

HQ

Super Audio CD

OVCL
00511

© 2013 Octavia Records Inc.
Made by Octavia Records Inc., Japan. Unauthorized reproduction prohibited.



マーラー

GUSTAV MAHLER (1860-1911)

交響曲 第1番 ニ長調「巨人」

Symphony No.1 in D major "Titan"

- ① 1 Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut
- ② 2 Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
- ③ 3 Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
- ④ 4 Stürmisch bewegt - Energisch

エリアフ・インバル (指揮)

ELIAHU INBAL (conductor)

東京都交響楽団

TOKYO METROPOLITAN SYMPHONY ORCHESTRA

2012年9月15日 東京芸術劇場、9月16日 横浜みなとみらいホールにて収録
 Recording Date: 15,16 Sep. 2012

Recording Location: Tokyo Metropolitan Theatre, Yokohama Minato-Mirai Hall

インバル&都響による新・マーラー・ツイクルス

岡本 稔

エリアフ・インバルは、2008年に東京都交響楽団のプリンシパル・コンダクターに就任したのを機に、マーラーの交響曲を積極的に取り上げ、きわめて完成度の高い名演を実現してきた。それは実演に接した人ばかりでなく、ライヴ収録されたCDによっても、広く知られている。これまでにリリースされた第2番《復活》、第3番、第4番、第8番《千人の交響曲》はいずれ劣らぬ名演揃いだ。

都響はマーラーの演奏解釈に豊かな経験を持つオーケストラ。その伝統は若杉弘(88~91年)、インバル(94~96年)、ガリー・ベルティニー(2000~04年)とともにに行ったマーラー・ツイクルスで培われてきた。インバルも、80年代にフランクフルト放送交響楽団と全集録音を完成させ、マーラー解釈の新たな地平を開き、その後もことあるごとにこの作曲家の作品を取り上げてきた経緯がある。

フランクフルト放送響の演奏と近年の都響の録音を比較すれば顕著なように、インバルのマーラー解釈は、確実に深化し、円熟味を加えてきた。一方の都響もマーラーを演奏するのにふさわしい音楽に対する柔軟な感受性、多彩な表現力を培ってきた。そうしたインバルと都響が満を持して2012年にスタートさせたのが新・マーラー・ツイクルスである。その第一弾となったのがここに収録された交響曲第1番《巨人》で、2012年9月に演奏会は開かれている。

「都響とは1994-96年にかけて全交響曲ツイクルスを行

いましたが、再び2007年からいくつかの交響曲を取り上げてみると素晴らしい変化が起こっていました!都響は大きな成長を遂げ、高い集中力と深い理解、音の美しさと深みを湛え、そして何よりも、混沌から最も繊細な表現まで、マーラーに必要とされるあらゆる表現法のパレットを手に入れたのです。」

このインバルの言葉に端的に言い表されているように、この演奏ではマーラーの音楽が持つ多彩な要素がすべて兼ね備えられている。インバルはスコアの隅々にまで神経を行き渡らせ、作品全体を搖るぎなく構築するとともに、マーラー特有の狂気をもあわせ持たせた解釈は大きな説得力を持っている。都響は堂々とした風格を感じさせる演奏を展開。コンサート・マスター、四方恭子、矢部達哉がトップをつとめるヴァイオリンをはじめ、各セクションが好調ぶりを示している。この録音は、インバルのもと都響が今、最良の状態にあることを示す名盤といえるだろう。

インバルには、2011年11月3日、4日に収録されたチェコ・フィルハーモニー管弦楽団を指揮した交響曲第1番《巨人》のディスク(EXTON EXCL-00085)もあり、オーケストラの違いを聴き比べるのも興味深い。一人の指揮者が一年の間隔も置かず、同じ曲を録音するというのは異例のこと。しかし、2つのディスクを聞くと、それぞれが独自の存在感を持っていることがわかる。チェコ・フィルもまたマーラー演奏にかけては長い伝統を誇る団体で、それぞれのオーケストラの持ち味がありのままに示されたいずれ劣らぬ名演といえるだろう。

(おかもと・みのる)

曲目解説

岩下 真好

交響曲 第1番について

1886年、26歳となったマーラーは、その年の秋の新シーズンからライプツィヒ市立歌劇場に第2常任指揮者として着任する。首席指揮者はアルトゥール・ニキッシュだった。当初マーラーが担当したのはワーグナーの『タンホイザー』と『リエンツィ』、ウェーバーの『魔弾の射手』などで、のちにはニキッシュに代わって『ニーベルングの指環』やモーツアルトの主要作品など、劇場の中心演目を担当するようになった。マーラーは指揮者としての自信を深め、「世評によれば、もうかなりいい所まで昇りつめているということだ。カーテンコールもしょっちゅうだ…。事実上あらゆる点でニキッシュと同格に扱われている」と友人に宛てた手紙で、音楽的伝統豊かなこの大都市での成功ぶりを誇らしげに書いている。

このライプツィヒでの多忙な劇場生活のかたわら、マーラーが没頭したのが交響曲第1番の作曲だった。ウェーバーの孫にあたるカール・フォン・ウェーバー大尉の妻マリオンとの道ならぬ恋の情熱が、マーラーを作曲へと駆り立てたのかもしれない。この交響曲に当初マーラーは、ジャン・パウルの同名の小説への感激から、『巨人』というタイトルを与えようと思っていた。さらに各楽章にも、およそ次のような標題が考えられていた。

第1部『青春の日々より、花、果実、茨』

第1楽章：春、ただひたすらに（導入部とアレグロ・コーモド）。導入部は長い冬の眠りからの自然の目覚めを描く。
第2楽章[現行4楽章版では削除]：花の章（アンダンテ）。
第3楽章[現行4楽章版の第2楽章]：帆に風をはらんで（スケルツォ）。

第2部『人間喜劇』

第4楽章[現行4楽章版の第3楽章]：難破！（カロ風の葬送行進曲）。童話画『狩人の葬送』。
第5楽章[現行4楽章版の第4楽章]：地獄から（アレグロ・フリオーゾ）。奥深く傷ついた心の突然の爆発。

これらの標題は、その有無も含めて実演をとおしてマーラーが作品に手を加えるごとに変転している。1889年、ブダペストで「2部からなる交響詩」として作品が初演された際には標題は掲げられなかったが、ハンブルク（1893年）とワイマール（1894年）の上演では、それぞれ幾分異なった表現で明示された。そして、1896年、ベルリンで「大オーケストラのための交響曲」として演奏された際には標題も《巨人》というタイトルも削除され、1899年に総譜が出版された際にも、それらは取り除かれている。したがって今日、この交響曲に《巨人》というタイトルを付けて呼ぶことが作曲者の意図に適したことなのには疑問の余地がおおいにあり、また、上に掲げたような標題を意識することが作品理解に不可欠であるとまでは言いがたい。

だがまた一方で、《巨人》というタイトルは、たとえば

幾つかのハイドンの交響曲の単なるニックネーム的なタイトルとは本質的に異なり、作曲者の作品構想と密接にかかわるものであるし、各楽章の標題も、この交響曲の作曲時にマーラーの頭の中にあった発想やイメージを知るための興味深い手がかりとなる。E・T・A・ホフマンの世界やダンテの『神曲』の世界を思わせる「カロ風の葬送行進曲」や「地獄から天国へ」といったイメージも面白いが、〈春〉に生成する自然のイメージや、その象徴としての〈花〉のイメージ（芽生え→開花→結実→再生=芽生え→）は、そのまま第3交響曲の理念に引き継がれてゆくばかりか、マーラーの全創作期をつなぐ基本的なイメージとしてとくに重要である。

さらにまた、第1楽章となる〈春〉の楽章と、ジャン・パウルの小説『巨人』の冒頭、第1巻第1章との関連も見逃しがたい（ちなみに最終的に削除されることになったオリジナル構想での第2楽章の「花の章」[ブルミーネ]という命名もジャン・パウルの造語によったものだ）。主人公の若いスペインの伯爵アルバーノ・ド・セサラはマジョーレ湖に浮かぶ島イゾラ・ベッラに渡る。「セサラは沈黙し、次第に明るくなってゆく岸と夜の美しさのなかに、いっそう深く身を沈めた。ナイチンゲールが春の凱旋門の上で、しきりにさえずっていた…。彼は目を閉じたまま。島の段状の庭の一番高いところで朝日が昇るのを待った。とうとう、ちりぢりになった朝焼けがヘスペリデスのりんごを結ぶ綱のように寄り合わさせて、遠くの栗の木々の上にかかった…。朝の風が太陽を暗い木々の枝の陰から押し上げて輝かせると、太陽は木々の上

でなにものにも遮られることなく燃えさかって…。なんとすばらしい世界だ！アルバーノはゆっくりと一周すると、空に、足元に、太陽に、花々に目をやった…」。

第1楽章の冒頭からの音楽とのイメージの重なり合いを感じができると思う。この第1楽章の楽譜の冒頭に、マーラーはわざわざ、「自然の音のように」という指示を書き込んでいる。つまり、マーラーは、春の朝の自然の目覚めを音画風に描こうとしたのではさらさらなく、ジャン・パウルの『巨人』の描写やみずから自然体験をもとに、春の朝の自然の目覚めそのものを直接に彼の音楽の言語で表現しようとしたのである。自然の描写ではなく、音楽による自然の在りようそのものの創出。これは第3交響曲においていっそう徹底して試みられることになる。マーラーの交響曲世界のもっとも重要なキーワードである〈自然〉は、けっしてマーラーの哲学的洞察のなかでのキーワードであっただけではなく、それと同時にマーラーの音楽言語上のキーワードであったのだ。ここにマーラーの音楽の大きな特質がある。

マーラーは、のちに〈花の章〉を削除して4楽章構成の交響曲とした。その第1楽章と第3楽章には、歌曲集『さすらう若人の歌』からのメロディが印象ぶかく引用されている。失恋の苦悩に始まり、東の間の自然の慰めのあと、悲劇的な感情の爆発を経て菩提樹の花に埋もれながら諦念と再生への夢にひたる『さすらう若人の歌』が、この交響曲のなかで回想されていることの必然性も、おおいに納得がゆくのではあるまい。

各楽章についてのメモ

第1楽章：ゆっくりと、引きずるように、自然の音のように
に～常にきわめてゆっくりと
ニ短調～ニ長調、ソナタ形式。夜明けと自然の目覚めを暗示するかのような神秘的な序奏部のあと、これに続いて導き出される第1主題は《さすらう若人の歌》の第2曲「朝の野辺を歩けば」からのものだ。再現部に入る直前にシンバルの一撃とトランペットのファンファーレが突発して音楽が炸裂する。

第2楽章：力強く動いて、だが速すぎずに～トリオ、まさにゆっくりと
イ長調。スケルツォ楽章で、主部は野性味あるレントラ風の舞曲。これに対してトリオは緩やかなヴィンナ・ワルツだ。

第3楽章：厳肅かつ莊重に、引きずらずに
ニ短調、3部形式。ティンパニが刻むリズムに乗って、弱音器付きのコントラバス独奏が、ヨーロッパでよく知られた俗謡「ブルーダー・マルティン」の旋律を奏でる。中間部は《さすらう若人の歌》の第4曲「恋人の青い瞳」の主題による。

第4楽章：嵐のように動いて
ヘ短調、自由なソナタ形式。激しく渦巻く序奏に続き、雄渾に進む行進曲風の第1主題と、緩やかに歌う第2主題が示される。エネルギーで変化に富んだフィナーレ楽章だ。

(いわした・まさよし)

エリアフ・インバル

1936年イスラエル生まれ。エルサレム音楽アカデミーでヴァイオリンと作曲を学んだ後、L.バーンスタインの推薦によりパリ高等音楽院で、L.フレスティエ、O.メシアン、N.ブーランジェらに師事。またF.フェラーラ、S.チェリビダッケから強い影響を受ける。1963年グイド・カントリ指揮者コンクール優勝以来、欧米や日本の主要楽団に数多く登壇し、国際音楽祭へも定期的に出演を重ねる。

これまでフランクフルト放送交響楽団(現・hr交響楽団)常任指揮者、RAI国立交響楽団(トリノ)名誉指揮者、ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団常任指揮者、フェニーチェ劇場(ヴェネツィア)音楽監督、チェコ・フィル常任指揮者など歴任。

マーラーとブルックナーのスペシャリストとして知られ、1980年代のフランクフルト放送響との両交響曲全集が独シャルプラッテン賞、仏レコード大賞など受賞して以来、フィルハーモニア管、チェコ・フィル、ベルリン・コンツェルトハウス管、フェニーチェ劇場管、都響などとのマーラー・ツィクリス、ラインガウ祭でケルンWDR響とのブルックナー・ツィクリスを成功させている。

さらに膨大なディスコグラフィーには、ベルリオーズ、ブラームス、ブルックナー、マーラー、ラヴェル、シューマン、ショスタコーヴィチ、スクリャービン、ストラヴィン斯基、R.シュトラウス、新ウィーン楽派の全曲集などがあり、フランクフルト放送響のほか、フィルハーモニア管、

フランス国立管、ウィーン響、ロンドン・フィル、スイス・ロマンド管、チェコ・フィルなどと録音を重ねている。

RAI交響楽団との「ニーベルングの指環」がイタリア批評家アッピアーティ賞、ヴィオッティ賞を受賞。フランス政府から芸術文化勲章(オフィシエ)、ウィーン市から功労金賞、フランクフルト市名誉ゲーテ勲章、ドイツ連邦共和国功労勲章を授与された。

東京都交響楽団には1991年に初登壇後、特別客演指揮者(1995～2000年)を経て、2008年プリンシパル・コンダクターに就任。マーラー交響曲集などのライヴCDを次々とリリースし好評を得ており、ショスタコーヴィチ:交響曲第4番では第50回レコード・アカデミー賞を受賞。

2012-2014年都響との2回目となるマーラー・ツィクリスが好評を博している。

東京都交響楽団

東京オリンピックの記念文化事業として1965年に東京都が設立。歴代音楽監督は森正、渡邊暁雄、若杉弘、ガリー・ベルティーニ。現在、プリンシパル・コンダクターをエリアフ・インバル、レジデント・コンダクターを小泉和裕、プリンシパル・ゲスト・コンダクターをヤクブ・フルシャ、またソロ・コンサートマスターを矢部達哉、四方恭子、コンサートマスターを山本友重が務める。

定期演奏会などを中心に、ティーンズとの「ジョイントコンサート」、年間約60回の音楽鑑賞教室、ハンディキャップをもつ方々のための「ふれあいコンサート」や地方公演など、多彩な活動に取り組んでいる。

CDリリースは、若杉弘、ベルティーニ、インバルによる各『マーラー交響曲集』の他、武満徹作品集などの現代日本管弦楽曲や人気のゲーム音楽『ドラゴンクエスト』まで多岐にわたる。1991年「京都音楽賞大賞」を受賞。2012年3月のインバル指揮「ショスタコーヴィチ:交響曲第4番」の演奏は、そのライヴCDとともに絶賛を博し、第50回レコード・アカデミー賞(交響曲部門)、第25回ミュージック・ペンクラブ音楽賞(コンサート・パフォーマンス賞)および(録音・録画作品賞)を相次いで受賞。

これまでに欧米やアジアで公演を成功させ、2013年5月にはプラハの春国際音楽祭などに招かれてチェコおよびスロバキアで公演を行うなど《首都東京の音楽大使》として国際的な評価を得ている。略称:都響。



Gustav Mahler
Symphony No. 1 in D major

The first of Mahler's nine completed and numbered symphonies shows his unique approach to the genre already fully formed. It is on a broad scale, articulated by a bold use of tonality; it makes vivid use of a large orchestra; and it treats a wide range of material, including song and dance tunes, fanfares and marches, in changing tones of voice, from impassively descriptive and playfully ironic to directly passionate. What makes this achievement all the more remarkable is that the work was Mahler's first major composition for orchestra alone – though it had been preceded by the equally prophetic cantata *Das klagende Lied* for soloists, chorus and orchestra. He seems to have begun sketching the Symphony as early as 1884, when he was conductor at the Kassel Opera House. But he composed most of the score in Leipzig, where he had gone as second conductor, in early 1888. "How it burst out of me, like a mountain torrent!", he later recalled. "For six weeks I had only my writing desk in front of me."

The initial impetus for the Symphony seems to have been provided by Mahler's first two love affairs, in Kassel and Leipzig respectively: but quite how much he conceived the work as an autobiographical narrative is unclear. When it was first performed in November 1889 in Budapest, where he was by then Director-General of the Royal Opera, it was described as a "Symphonic Poem in two parts", but without a detailed programme. At subsequent performances in Hamburg and Weimar in 1893 and '94, it was given the title of *Titan*, after a novel by the German Romantic writer Jean Paul, and the individual movements

also had titles and in some cases explanatory commentary. But Mahler later claimed that he had thought up this partial programme after composing the work, simply as an aid for listeners, and that it had proved inadequate and misleading. For the next performance, in Berlin in 1896, he removed it, calling the piece simply "Symphony in D major for large orchestra". At this stage he also withdrew the original second movement, a simple Andante called *Blumine* (a poetic version of the word for "Flowers"), which was to remain unpublished until 1967. Throughout this series of performances, Mahler made various revisions to the score of the Symphony; he further revised it, enlarging the orchestration, for its first publication in 1899; and he continued to make detailed changes for the rest of his life.

The work begins with a substantial minor-key introduction, which according to the composer's discarded programme depicts "the awakening of nature from the long sleep of winter". The depths of a vast forest, surely the Moravian forest of Mahler's childhood, are suggested by wide-spread octave As, distant fanfares and snatches of bird-song. A recurring figure of interlocking descending fourths is later counterpointed by another theme winding upwards from the depths. The first section of the main Allegro is adapted from the second song in Mahler's cycle *Lieder eines fahrenden Gesellen*, written (though not yet orchestrated) around 1884; in the song, a young wayfarer expresses his delight at the sights and sounds of nature. After a repeat of this section (added late in the process of revision), the mood and themes of the introduction return at the start of the development section; but new ideas are also introduced both here and following the gradual return

to the tempo of the Allegro. A climax of triumphant fanfares leads to a truncated recapitulation, which maintains a high level of excitement to the end of the movement.

The second movement is a sturdy, rustic ländler in A major, loosely based on Mahler's early song Hans und Grete. There is an F major trio section of lazy Viennese charm, followed by a shortened reprise of the ländler.

In his programme, Mahler said that the D minor third movement was originally suggested by a picture in a book of fairy tales, "known to all children in Austria", depicting a huntsman's funeral procession, and showing the coffin followed by all the creatures of the forest and "a band of Bohemian musicians". The movement begins with a round, the familiar Bruder Martin or Frère Jacques but in the minor key, led off by solo double bass, muted and in the high register, and accompanied throughout by alternating Ds and As. A contrasting episode parodies the schmaltz and swagger of klezmer and village bands. After a brief reprise of the round, there is a second episode, adapted from the final song of the Fahrenden Gesellen cycle, in which the wayfarer, disappointed in love, recollects past happiness in sorrowful tranquillity. The round resumes at its initial speed, and mingles with echoes of the band music, which suddenly puts on a burst of speed before the quiet ending.

Without a break, the finale bursts in with a "tempestuous" introduction representing, according to Mahler's programme, "the sudden eruption of a heart wounded to the quick". The effect is shattering, as if Mahler has taken

off all his previous masks of assumed simplicity and exposed his inmost feelings; and it is all the more arresting because the key is the remote one of F minor. The same key is retained for the first theme of the main Allegro, an upward-thrusting march adapted from an idea in the first-movement development, which is worked up at some length. Contrast comes from a yearning, soaring second subject in D flat major. The development section begins by returning to the slow tempo, wide-spaced octaves and principal themes of the introduction to the whole work; but then the storm breaks out again, and after a calm interlude, with a new melody assembled from earlier ideas, reaches a sustained climax. A convulsive heave brings the movement's first glimpse of D major. But the vision fades: major turns to minor, and the ideas of the forest introduction return once more, leading to a sorrowing, halting recapitulation of the second subject. The first theme gradually reasserts itself, and progresses towards a fanfaring climax which echoes the climax of the first movement. This time D major is firmly re-established, and it is maintained as earlier themes are recalled, recombined and extended in the jubilant coda.

Anthony Burton © 2010

Elijah INBAL (Principal Conductor)

Born in Israel in 1936, Elijah Inbal studied violin and composition at the Jerusalem Music Academy before completing his studies at the Conservatoire National Supérieur in Paris upon the recommendation of L.Bernstein. His teachers there included L.Fourestier (conducting), O.Messiaen, and N.Boulanger. His musical development was also heavily influenced by F.Ferrara (in Hilversum) and S.Celibidache (in Siena). Since winning 1st prize in the Guido Cantelli Conducting Competition at the age of 26, he has enjoyed an international career, conducting world's leading orchestras and appearing at international festivals. Chief positions were held, among others, at Frankfurt Radio Symphony (present hr-Sinfonieorchester), Konzerthausorchester Berlin, Teatro la Fenice di Venezia and Czech Philharmonic. Maestro Inbal's extensive discography includes the complete symphonic works of Bruckner, Mahler, Schostakovich and others, and awarded many prizes such as the Deutscher Schallplattenpreis, the Grand Prix du Disque and the Prix Caecilia. Recipient of numerous honors including Officier des Arts et des Lettres by the French government and Goldenes Ehrenzeichen of the city of Vienna. He assumed the position of Principal Conductor of the Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra in April 2008. Numerous live CDs with the TMSO met with high acclaim, including the renowned Japan's Record Academy Award.

Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra (TMSO)

Since the establishment by Tokyo Metropolitan Government in 1965, TMSO has grown to become one of Japan's foremost professional orchestras under the music directorship by Tadashi Mori, Akeo Watanabe, Hiroshi Wakasugi, and Gary Bertini. Currently Elijah Inbal serves as Principal Conductor, while Kazuhiro Koizumi serves as Resident Conductor, and Jakub Hruša as Principal Guest Conductor. Numerous discographies include works of Mahler conducted by Wakasugi, Bertini and Inbal, and of Takemitsu, as well as popular game music "Dragon Quest". In 2012, TMSO won the Japan's 50th Record Academy Award for Best Symphony Album Shostakovich's Symphony No. 4 conducted by Inbal. They also received the 25th Music Pen Club Awards in both categories of Best Concert Performance and Best Recording Product for the same Shostakovich's performance. Overseas tours include Europe, Russia, North America and Asia. In May 2013, TMSO goes on a tour in the Czech Republic and Slovakia where they are invited to appear in the Prague Spring Festival and others as the "Music Ambassador of Capital Tokyo".

●  and DSD are Trademarks.

●DSDの音はSACD対応プレーヤーでお楽しみください。尚、本品はCDレーヤーをあわせ持った二層構造の「ハイブリット・ディスク」になっておりますので、通常のCDプレーヤーの多くのものでもCD品質の音でお楽しみいただくことができます。また、DVDプレーヤーの場合は、CD対応となっている機種でもかかるものがありますので、あらかじめ御了承ください。詳しい再生上の取り扱い方については、ご使用になるプレーヤーなどの取り扱い説明書をご覧ください。

●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等をつけないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。●ご使用後、ディスクは必ずプレーヤーから取り出し、専用ケースに入れて保管して下さい。●ディスクケースの上に重い物を置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。



Producer: Tomoyoshi Ezaki

Recording Director: Tomoyoshi Ezaki

Balance Engineer: Tomoyoshi Ezaki

Editor: Keiji Ono

Photographer: Hikaru Hoshi, Fumiaki Fujimoto (P6)

Cover Design: Yusaku Fukuda

東京藝術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre

YOKOHAMA
MINATO MIRAI HALL

マーラー

GUSTAV MAHLER (1860-1911)

交響曲 第1番 二長調「巨人」

Symphony No.1 in D major "Titan"

① 1 Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut	14:58
② 2 Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell	7:48
③ 3 Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen	9:32
④ 4 Stürmisch bewegt - Energisch	18:47



Hybrid Layer Disc



エリアフ・インバル (指揮)

ELIAHU INBAL (conductor)

東京都交響楽団

TOKYO METROPOLITAN SYMPHONY ORCHESTRA

2012年9月15日 東京芸術劇場、9月16日 横浜みなとみらいホール にて収録

Recording Date: 15,16 Sep. 2012

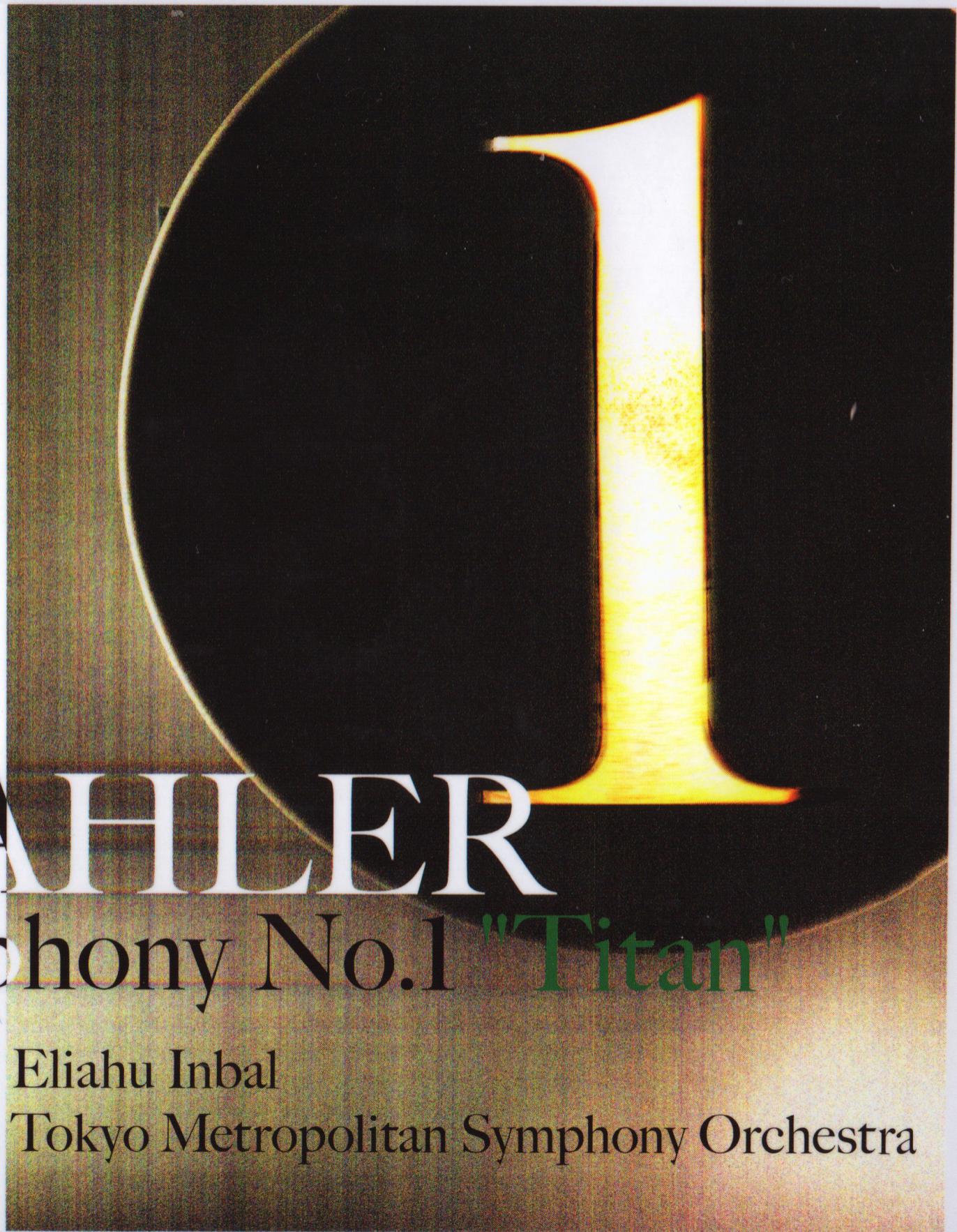
Recording Location: Tokyo Metropolitan Theatre, Yokohama Minato-Mirai Hall

TOTAL TIME 51:06



このCDを、権利者の許諾なく販賣業に使用すること、ネットワーク等を通じてこのCDに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。また、個人的に楽しむなどの場合を除き、著作権法上、無断複製は禁じられています。

EXTON



MAHLER

Symphony No.1 "Titan"

Eliahu Inbal

Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra



SUPER AUDIO CD



HIGH QUALITY

Super Audio CD

EXTON



MAHLER

Symphony No.1 "Titan"

Elijah Inbal

Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra



Super Audio CD



Super Audio CD

（インバル＝都響 新マーラー・ツイクリス）
現代のマーラー演奏の最高峰がここに！

EXTON

マーラー・交響曲 第1番「巨人」

エリアフ・インバル（指揮） 東京都交響楽団

EXTON

マーラー・交響曲 第1番「巨人」

インバル（指揮）
東京都交響楽団

SUPER AUDIO CD
COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

OVCL
00511

定価¥3,200（税別）

OVCL-00511

2012年9月よりスタートした巨匠エリアフ・インバルと東京都交響楽団による＜新マーラー・ツイクリス＞ライヴ盤の登場。現在音楽界において最も注目されている同コンビの集大成ともいえるシリーズです。インバルを世界的巨匠へ押し上げたマーラー演奏。圧倒的な技術とアンサンブルで驚くべき見事な演奏を繰り広げる東京都交響楽団。両者のボルテージが最高潮へと導かれ、世界最高峰の演奏と言われるマーラーが姿を現します。黄金期を闊歩するインバル＝都響の最終章。一つの音も聞き逃すことの出来ないマーラー・シリーズが遂にスタートします。

CD専用プレーヤーもしくは
SACD対応プレーヤーで
再生してください

13・6・26 (日)

DSD
RECORDING



このCDを、権利者の許諾なく賃貸業に使用すること、ネットワークを通じてこのCDに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。また、個人的に楽しむなどの場合を除き、著作権法上、無断複製は禁じられています。



STEREO MADE IN JAPAN

発売・販売元：株式会社オクタヴィア・レコード